

バベルの塔と国際化

半年前の2月24日、世界は一変した。

29年前、農林中央金庫に奉職し、ことあるごとに「適地適作なコメは日本にとって特別」だの「平時の輸出を通じた自給力メンテが大事」だの言ってきたが、担当業務に関係ないのにそんなことを言って正直少し変わり者のように見られていた。「戦争は起きない」「食料の貿易が途絶えることはない」世界では無理からぬこと。自分だって、テレビの画面越しではあったが、上京した年にハンマーで壁を砕くベルリンの若者の姿を目撃してるじゃないか。そもそも小学5年生の社会科の授業で自給率の低さに驚き、これは何とかしないと、と強く心に刻んだのは、それがまだ冷戦中だったからなのかも・・・。

それが、である。戦争は起こってしまった。平成に入ってからには多くの人は自分が生きているうちには起こらないと安心して、その戦争が、今、目の前で進行中である。世界は安心な場所ではなくなった。食料安全保障にもっと必死になるべきだった。事が起こってからしたり顔で議論するネタではないのに、甘かった。

シンクタンクとして今からでもできることはある。この先どうなるのかを考え抜いて、備えの選択肢を提示することだ。

まだまだ考えが足りないが、低くない確率で、世界経済の再ブロック化を想定しておくべきかもしれない。そのなかで、農業の国際分業、世界の食農ビジネスがどうなっているかを想像し、わが国の食農セクターにとってよりよき方向を示す必要がある。

化成肥料や農薬への依存度も下げながら、生産量も上げていく。結局、技術のブレークスルーが必須だが、ある程度まではSDGsがきっかけとなった投資が味方してくれそうだ。生産基盤としての人や農地の低減傾向を反転させねばならず、制度面でも支えが要る。社会的コストを極力抑える組合せを探るのが社会科学系シンクタンクの当社の役割であろう。

「高価だが国産」と「安いから輸入」のバランスをどう取るか、接收リスクまで考慮に入れた海外投融資、途絶に備えたサプライチェーンの再最適化、など、すでに食農企業の経営陣を悩ませているであろう課題にも寄り添いたい。

神話の時代、バベルの塔を建てた人類は神の怒りに触れ異なる言葉を話すようになった。令和の時代、旅行・出張でかつてなく交流していた人類に神が怒ったかどうかかわからないが、新型コロナで人々は自分の部屋に閉じ込められ交流を妨げられた。

2022年の侵攻は、言葉の違いを翻訳ソフトで克服し（第一次バベルの塔）、コロナを克服すべくWEB会議やSNSでつながった（第二次バベルの塔）ことに、今度こそ神は怒ってしまったからというわけではもちろんない。だが、「他国とは協調などできないのだ」という不信の種がまかれた。コロナよりもひどい伝染病だ。先の大戦の背景ともなったブロック化の誘惑にあらがい、第三次バベルの塔と呼ばせないようにしなければならない。

これまでよりももっと世界に友達やパートナーを求めなければならない。ブロック化への備えは備えとして、日本人は一層国際化する必要があるだろう。そして当社も。

（株）農林中金総合研究所 常務執行役員 小畑秀樹・おばた ひでき